

Title	七十年代の露西亜社会思想概観
Sub Title	
Author	伊藤, 秀一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.2 (1925. 2) ,p.201(49)- 251(99)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250201-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

本篇を草するに於て参照したる主なる著作は左の數書である。

- (1) 英譯リオン、セーのチェルボイ傳 (2) Shepherd, Turgot and the Six Edicts (3) Higgs, The Physiocrats (4) Tallentyre, The friends of Voltaire (5) バルグラーズ經濟字典チェルボイの頁(6) 天保新政錄(7) 内藤恥叟德川十五代史(8) 小宮山綏介德川太平記(9) 商業叢書(國書刊行會發行)

七拾年代の露西亞社會思想概観

伊藤秀一

一八六一年の農奴解放令宣布を一轉機として社會的不安と動搖との間に醸成せられ、專制政府の苛烈なる抑壓に遭遇して益々激成せられたる露西亞の革命的社會運動は、假令未だ廣汎なる組織的民衆運動の實を具へず、僅かに革命主義的結社の陰謀擾亂に過ぎざりしと雖も、茲に後代に於ける專制主義的露西亞帝政の覆滅並に此の國に於ける社會組織の根本的變革の動因を觀取し得可く、茲に後年繼承し敷衍し發揚せら

れたる此國獨特の革命主義的社會思想の淵源を探究し得るであらう。故に筆者は嘗て本誌にて、露西亞革命運動の先驅者 Chernyshevskii 並に Dobrolyubov の社會主義思想の要領を視ひ、進んで露西亞虛無主義に言及した。又此等の主義思想を信奉せる革命主義者等が抑壓的權威に對する否定と破壊との矛を先づ專制的壓制政治に向け、其の結果は「土地と自由」黨 (Zemlja i Volja) の陰謀となり Karakozov の皇帝歴山二世狙撃事件を惹起するに至れるの事情を指摘した。而して最後に、政府の峻酷嚴密なる反動的壓迫愈々大となるに従つて革命的反逆の思潮は愈々極端過激に奔り、六拾年代の終末に至りて遂に Nechaev の如きが總破壞的恐怖主義的譎詐陰謀の主張を公然宣言するに至つたと述べ、之に次ぐ年代に於て Bakunin 等の無政府主義的思想傾が此國の社會運動を支配するに至つ

たと結論した。(本誌第十八卷第七號「第九號」所載、拙稿「農奴解放後の露西亞社會運動」參照)

故に筆者は進んで七拾年代以降の露西亞社會運動を檢察せんとするに當り、先づ當時の社會運動の背景となつて居た所の革命主義的社會思想の概要を覗ひ、之が實際運動との關係を論述し度いと思ふ。

凡そ Pisarev の例に於て指示したる如く(前掲拙稿參照)六拾年代以降露西亞の知識階級間を風靡し席卷したる革命的精神運動即ち虛無主義の思想は次第に其の狹隘なる個人主義的消極的限界を蟬脱し、個人の自由、個性の發展は、社會的、政治的、經濟的關係を離れて存在せずとの見解を隨伴し、従つて權威に對する其の批判と否定とは、今や當初の觀念的な領域より轉じて、實際上の外部的壓迫、就中國家、教會及び家

族關係の壓迫に對して向けられ、總ゆる方面に亘つて個性の十全無障の發達を保證せんとする努力が歴然顯著なる傾向となつた。換言せば、

六拾年代の個人主義的虛無主義の思想は今や明かに社會主義的思想傾向に變じた。共に七拾年代の露西亞に於ける卓越せる社會思想家にして且つ當年の社會運動の指導者たりし、無政府主義學派の巨擘 Mihail Bakunia 並に露西亞主義學派の双壁 Lvrov 及び Mihalovski は、縱令夫々相對峙する二大學說の代表者として當然區別せらるゝ所なりと雖も、而も彼等の學說に於て各々叙上の思想傾向を代表し或は之を傳承し集成したものであると言ふ事が出来る。此の意味に於て又七拾年代の社會思想は前代に於ける二個の思想的傾向、即ち Černyševskii, Dobrojubov 等の社會主義思想並に Pisarev に依つて代表せられる虛無主義の合流であると觀する

事が出来るであらう。(前掲拙稿、第八號一一四頁參照)

嘗に此の根本的思想の脈絡に於て然るのみならず、露西亞の特殊なる社會的進歩に關する觀念、或は村落共產團體制度に對する過重過信の點に於ても亦、七拾年代の社會思想家は略々前代の見解を其の儘踏襲したものと考へられる。そは云ふ迄もなく社會主義的理想社會の實現は、露西亞に於ては、現存の村落共產制度の基礎の上に、即ち此の原始的共產制度を維持し發展せしむる事に依つて、換言せば資本主義的過渡的發達階梯を経由せずして達成し得るとのナロドニキ的觀念之である。

以下順次前記三大思想家の各々に就いて之が考察の筆を進むるであらう。

二

一八一四年五月八日トエル地方の一貴族の家

第十九卷 (二〇三) 七拾年代の露西亞社會思想概観

に生れ、同七六年七月六日ベルンの病舎に客死するに至る迄、六拾有餘年の全生涯を稀有の數奇なる運命に委ね、其の革命的熱情、不撓不屈の意志、絶倫の精力を持つて、當時西歐諸國を席卷せる殆ど總ての革命運動の間を自由奔放に馳驅し、社會運動史上不朽の盛名を傳へられるミハエル・バクウニン(Mihail Bakunin)は、又其の雄渾濶達なる學說を通じて、秋霜烈日なる社會批判の鍵鑰を後代に遺した。併し乍ら彼が流離轉變の全生涯と其の無政府主義理論の全豹とを茲に描出する事は到底不可能であるから、筆者は専ら露西亞社會運動に關する限りに於て其等の一端に觸るゝ事を以て満足しなければなら

ない。
バクウニンの社會學說の基礎を爲すものは其の有機的社會觀である。曰く「我々は他の有機體の觀察に於けるが如く人類社會を觀察しなければ

ばならない。勿論それは生物學上の有機體よりも遙かに甚だ複雑ではあるが同様に自然法則の支配を受けて居る。人類社會は又此の自然法則以外に社會自らの排外的な獨特の法則に依つて支配せられる」。(Bakunin, Works, Bolashev ed. (Russian), vol. i. p. 89, cited by Hecker, Russian Sociology, p. 74)即ち「諸々の人民は肉體的、精神的、政治社會的特性を所有する一の共同體として現はれる。此等の特性が其人民に個性を與へ且つ總ゆる他の人民から區別するものである。總て此の事は「其の一部は知られ、其の大部分は未だ知られざる所の、數ひ切れない程夥多な大小の原因が無限に複雑に聚合して居るといふ事に歸せられる」(Works p. 91. Hecker. *ibid.*)又バクウニンに依れば、凡そ存在する總ゆるものは、其等の量や質の如何に拘らず、且つ希望し若くは意識すると否とに拘らず、直接又

は間接の動、反動に依つて相互に影響し合ふものである。統一的運動に結合されたる此等の無限の活動及び反動は我々が統一、生命、因果と呼ぶ所のものを包含する。(ibid)又曰く、「此の普遍的生命が世界を創造する、—此の生命は社會の總ゆる過去を創造し、又將來の總ゆる發展を創造しつゝ、人類世界に永續するものである」(Works. p. 90. Hecker, *ibid.*)

バクウニンは、彼が「生命は創造力である」とか又は人間は人類世界内部の動的創造力であるとか言つて居る場合に、此等の語を形而上學的に解釋してはならないと警告して居る。彼の所説に遵へば、人類世界と呼べる、所のものは人間以外の他の直接の創造者を有しない。人間は外界から少し宛獲得し來つて人類世界を作り、彼自身の動物性から其の自由と人類的威嚴とを

作る。彼は彼自身より獨立せる、制御し得ざる且つ同様に總ての人類の一職分である所の欲求の力に依つて外界を征服する。此の力、此の普遍的な生命の流は普遍的な因果律若くは自然と呼べる、所のものと同であり、植物たると動物たるとを問はず總ての生物の間に見受けらるゝものである。自己の生命に必要な、即ち自らの欲望を充足するに必要な條件を確立するといふのが各個性の傾向である。(p. 109. Hecker, pp. 74-75)「人は彼を作り出す所の環境の内部に於て、其の勞苦に依り、又彼の理性に従つて、自由の意識を獲得する」(p. 112)「自然其物は現象上の連續的變化に於て自由解放の方向に力める。…斯くてより大なる個性の自由こそ完成の眞實の徴候である様に思はれる」と、(p. 113)然るに更に進んでバクウニンの信ずる所に依れば、「人間は地上の萬物中最も個性化された

ものであると共に彼は又最も社會化されたものゝ如く考へられる」(p. 113)従つて社會は、現存する人民の自然的現象であつて或種の契約といふものとは何等の關係もない。社會を支配するものは人間の傾向と傳統的習慣とであつて決して法律ではない。社會が次第に進歩するのは個人の創造力の衝動に依つて促されるからであつて、立法者の思想や意志に依るのではない。(p. 133. Hecker, p. 75)社會及び社會進歩に關する斯の如き見解から彼は法律及び政治の無政府主義的否定を試みたのである。

又バクウニンに依れば、階級の發生は動物の差別の本能に基く。而して「動物の各種屬は再び地理的、氣候的條件の影響の下に變化する所の相異なる諸團體諸家族に分たれる」此の外界の影響を通して、小團體や小種類のもの、相互に敵對し相互に破壊せんとしつゝある所の種

屬の中に形成せられる。動物の本能的敵對心を彼は「自然的忠義心」と呼稱し、之を次の如く定義して居る。「それは社會的に承認されたる、相傳的、傳統的生活様式に對する、本能的、機械的、無批判的執着であり、且つ之れを異なれる他の一切の生活様式に對する、同様の、本能的、機械的敵對である」。(p. 193 & p. 194 Hecker, p. 76) 此の「自然的忠義心」が人類社會の中に移入せられ、宗教上の神聖化を裝ふて結局政治となる。故に曰く「斯くて神若くは神の擬制が地上に於ける總ての奴隸制度の承認者として、及び斯の如き制度の知識上、道德上の根據として表はれて居る。人間の自由は神聖なる支配者といふ有害な擬制を完全に絶滅したる時のみ完成せられるであらう」と。(p. 14 Hecker, pp. 76-77)

三

凡そ一八七〇年末の交に草せられ、著者の没

徒と共に、未だ充分に彼等の能力の發展に到達せざる人々の輕信的迷想に依つて創造せられた。従つて宗教上の天國とは、無智と迷信とに捉はれた人々が、其の中に擴大され、顛頭されたる、即ち神化したる自身の形像を見出す所の一の蜃氣樓に他ならない。故に宗教の歴史、即ち人間の信仰の中に相次いで現出し來つた神々の誕生、繁榮及び頽亡の歴史は、人類の集合的智慧及び良心の發展に過ぎない。 ("God and State," p. 23) 然るに今や神は全能である。而して其の眞の創造者たる人間は知らず知らずの間に彼等が空虚から抽出し來れる神の前に跪座し、神を尊崇し、自らが神の被造物であり神の奴隸である事を誓約する。若し神が萬物であるならば現實の世界と現實の人間とは無である。神が眞理、正義、善、美、力、及び生命であるならば人は虚偽、不正、惡、醜、無能及び死である。

後、一八八二年に初めてジュラ同盟の出版所から公刊せられたるバクウニンの主著 "Dieu et l'Etat" は、右の見解から出發して最も明快に神と國家の問題 ("L'Église et l'État sont mes deux Bêtes noires") を批判したものであると言ふ事が出來よう。

無神論のみが人類に對して眞の自由を齎し得る。故にそれは社會革命の第一の前提條件である。「神が存在する限り人間は奴隸である。然るに人間は自由であり得るし又自由でなければならぬ。従つて神は存在しなす」 ("God and the State" with a preface by Carlo Caffero and Eli-see Reclus. Mother Earth Publishing Association. p. 25) 此は實にバクウニンに依つて徹底的に提唱され強調されたる無神論の本體であつた。以下姑く其の推論の跡を検するならば、「凡そ總ゆる宗教は、其の神、神人、豫言者、救世主、聖

而して神の奴隸である所の人間は—國家が教會に依つて神聖化されて居る限りに於て—又教會及び國家の奴隸たらざるを得ないのである。(Ibid. p. 24) バクウニンは次いで言ふ「神の觀念は人類の理性及び正義の否定を含む。それは最も決定的なる、人類の自由の否定である。而して此の必然的結果は、理論上、實際上、兩方面に於ける人類の奴隸化である。故に我々が若しも人類の奴隸化と墮落とを欲しないならば、神學上又は純正哲學上其の何れの神に對しても些かの讓歩を爲す事が出來ないし又讓歩してはならないのである」。(Ibid. p. 25)

バクウニンの思念する所に依れば、宗教的迷信が斯くも深く人民の間に浸潤するに至れる最大の原因は彼等の貧困と奴隸状態とである。彼は言ふ、知的にも道德的にも又物質的にも最低限度の生存状態に限定され、恰も牢獄の囚人の

如くに其の生活を極限せらるゝ所の人民は、斯の如き状態の下に於ける苦惱を回避するため、次の三つの方法の何れかに倚らざるを得ないのである。其の最初の二つは居酒屋と教會とである。前者は肉體の感溺陶酔を意味し、後者は精神の感溺陶酔を意味する。(ibid. p. 16) 恐らくバクウニンに依れば、教會は一種の天國の居酒屋であつて居酒屋は之に反し地上に於ける天國の教會であつた。而して茲に彼が居酒屋と云ふ場合に露西亞の *Kabak* を心に描いたものと考へる事が出来る。教會では不合理的な信仰に耽溺し、居酒屋ではウオドカに耽溺し、斯くて農民(Muzik)は僅かに彼の悲哀と貧困とを忘れ得たからである。(Maerik: The Spirit of Russia, vol. I, p. 47) 参照)併し人々は今や此等の迷妄を脱卻して第三の眞の途を追求せねばならぬ。眞の途とは何か。バクウニンは之を社會革

類の不斷の流血的犠牲に過ぎない。(ibid. p. 50) と概じて、一切の抽象的權威の壓制を嫌忌し排斥する所のバクウニンは、此等の權威の拘束から人類を解放するための重要な任務を遂行する所の科學を以て、同様に生活の上に優逸せしむ可らずと説く。謂へらく「生命は須臾にして轉變する。併し乍らそは常に現實性、個性、感受性、苦惱、愉悅、希望、欲求及び感情を伴ふて鼓動する。そののみか自發的に眞實の事物を創造する。科學は何物をも創造しない。そは唯生命の創造物を確保し確認するに過ぎない。」一言以て覆へば、科學は生命の指針であつて生命ではない、従つて科學の唯一の使命は生命を啓發する事であつて之を支配する事ではない。(ibid. p. 55) 知識階級は民衆を教化しなければならぬけれども、此事は彼等に對して民衆に優越せる何等かの權利を與ふるものではない。

命であると言ふ。曰く「私は故に次の如く結論する、宗教上の信仰と人民の放埒なる習慣—此の兩者は一般に想像せられて居るよりも遙か密接に結合して居る—とを徹底的に破壊する爲めに、此の最後のものこそ實に自由思想家の總ゆる神學上の傳道よりも遙かに一層有力であらう。妄想的にして且つ獸的なる肉體的、精神的放肆の享樂に代ふるに、各人並に全人の中に發達せる、眞に洗練されたる人類愛の愉樂を以てする事に於て、正に社會革命のみが總ゆる居酒屋と總ゆる教會とを同時に閉鎖する權力を持つであらう」(Bakunin. op. cit. pp. 16-17)

又更に、絶對的平等の教義に遵つて、或者が他の者に優越する事即ち一切の掠取、換言せば總ゆる權威を全然非認する所の、又同時に從來の人類の歴史なるものを「或る冷酷なる抽象の名譽の爲めに供せられたる、貧しき幾百萬の人類の點に於ける不平等は曾に一時的現象たるのみならず、彼等は自ら行つて民衆の間から學ばねばならないものである。我々は後述する所ある可き當年の「民衆の中へ」の運動(V. narod)に於て、バクウニンの斯の如き思想を傳承し實行したる一群の知識階級を見るであらう。バクウニンは次いで言ふ、「假令彼等が實證論者であり、Auguste Comte の學徒であり、空論的獨逸共產主義學派の學徒であるとしても、凡そ科學の支配及び科學者の支配なるものは、常に無能無稽であり、殘忍酷薄であり、壓制的、掠取的にして且つ有害たらざるを得ないのである。」(ibid.) 我々が社會科學を要求する所以のものはそれが個々人の苦惱の一般的原因—此の原因として現實の各個人の、抽象的一般性に對する犠牲と從屬とを擧げる事を忘れてはならない—を忠實に正確に指示し、同時に、社會的生活を營

む各個人の眞の解放の爲めに必要な一般的條件を我々に示すからである。之こそ科學の使命であつて且つ科學の限界である。此限界を越ゆる所の社會科學の活動は、無能にして且つ破壊的である。科學の自認代表者即ち其の僧侶の空論的主張は正に此の限界を超えて居る。今や一部の法王と僧侶とを勦滅す可き時である。假令彼等が自らを社會民主黨と呼ぶとも我々は最早や斯の如き人々を必要とはしないのである。」(Ibid. pp. 61-62)茲に又我々は次節に於て關説す可き Marx 對 Bakunin の爭論確執の理論的淵源の一端を見る。

最後に、絶對的平等なるものは社會的秩序を粉碎し、人類の組織を支離滅裂に崩壊せしめざるやの杞憂はバクウニンの全然排斥する所であつて、絶對的平等は之に反し、眞の社會的結合の可能を人類に賦與するものとして觀せられ

礎を與へたのである。

併し乍ら、上述せる所に依り、バクウニンの全思想體系に於て、如何に個性の尊重、個性の自由が其の重心となつて居るかといふ事、個性の自由と其の發達とを抑壓し阻止する所の一切の權威が如何に彼の熾烈なる熱情に依つて徹底的に糾弾され拒否されて居るかといふ事、而して就中當時の露西亞の社會的實情に於て彼の斯の如き批判的見解が如何に適切であつたかを略々了知する事が出來よう。故に筆者は之れ以上彼の思想の内容に立ち入る事を止め、纏つて國際労働者協會(第一インタナショナル)に於けるバクウニンのマルクスとの確執と、之れが露西亞社會運動との關係に言及しつゝ、併せてバクウニンが露西亞の社會的經濟的組織に對する批評乃至その露西亞社會運動に對する見解の主要を覗ふであらう。

る。彼は Proudhon の聯合組織即ち下から上にあつた所の聯合組織の主張を承認し、未來社會の計畫を共同體の自由聯合組織に基いて構成した。彼自らが Hegel の辨證論的形式に遵つて記述せる所に依れば、「中央集權主義的國家は Thesis であり、無政府又は無定形は Antithesis であり、獨立的の團體及び人民の聯合が Synthesis である。」(Bakunin's Sozial-Politischer Briefwechsel mit Herzen und Ogarjow, Stuttgart, 1895, S. 388. Cited by Hecker, op. cit. p. 77) 彼は斯の如き理想社會の實現のために先づ現存社會秩序の根本的變革を必要とし、其の一切の權威に對する否定の武器を最も強く現存の宗教的信仰並に國家的權力に對して差し向けたものであるが概ね彼の革命的理論は此の兩者の破壊を容易なりとするもの、如く、更に斯の如き信念に基き、彼は進んで其の革命的理論に哲學的倫理的基

四

恐らくは其起源の考證に於て幾多の異論他説ある可しと雖も、概ね其の誕生を一八六四年九月下旬倫敦 St. Martin Hall に於ける會合に歸せらる可き所の國際労働者協會(第一インタナショナル)の運動、就中一八六八年バクウニンの之に加盟以來此の運動内部に於て顯著となれる所の二傾向の乖離、即ち社會主義的傾向と無政府主義的傾向との爭論確執は、疑ひもなく七拾年代の露西亞社會運動に影響せる所甚だ大である。

素よりマルクス及びバクウニン兩者の根本思想の差違は全然氷炭相容れない性質のものであつた許りでなく、兩者相互の個人的嫌忌は引いて相互間の罵詈譏となり、嫉視反目となり、結局は國際労働者協會其物の決裂を招來したものであつた。バクウニンの主張する所は、國際

労働者協會其物をして新社會形態即ち無政府の萌芽たらしむ可しと言ふにあつた。故に彼は評議員會(General Council)に依る一種の中央集権的支配の存在を峻拒し、評議員會は廢止せられ國際労働者協會は各分派の完全なる自治主義の基礎の上に再建せらる可しと主張し、就中 Marx 及び Engels は彼等自身の獨逸猶太人の權力共產主義組織を國際労働者協會に強要するに努め進んで個人的獨裁權を獲得せんと企て、居るものであると非難した。他方 Marx は徹頭徹尾評議員會の權力を支持し、バクウニンの無政府主義的主張を難する事極めて峻酷なる一八七二年の小冊子 “Les Pretendues Scissions dans l'Internationale” に於て次の如く言明した。「無政府は彼等の君主バクウニンの偉大な軍馬である。總ゆる社會主義者は無政府とは次の事を意味するものである事を主張する。一度ば無産者階級は遂に私の頭上に落ちた。併し實を言へば其れは劍ではなくて Marx 氏の常套手段 — ein Kibel Spülwasser である。」(Steklow: Michael Bakunin. S. 117 参照)

惟ふに、一八六九年のバーゼルの大會以後事實上 Marx に依つて指導せられて居た國際労働者協會の評議員會は、一八七〇年の普佛戦争後新しき社會民主主義的傾向を帯びるに至つて一層バクウニン派との隔絶を深からしめたものである。即ち普佛戦争が佛蘭西の全敗に終り、次いで巴里コミューンの暴動が鎮壓され、而して佛蘭西の労働者の國際労働者協會に加盟する事を禁止せる峻嚴な法律が通過したる時、而して他方に於ては一八四八年以來急進黨の目的であつた所の議會政治が「統一された獨逸」に導かれるに及んで、全社會主義運動の目的と方法とを變改し様うとする努力が獨逸に於て行はれた。社

運動の目的即ち階級の廢止が達成せられると、其時少數の搾取者が多數の生産者を束縛するに役立つ所の國家の權力が消滅する。其時、政府の職分は單なる管理の職分に變化する。然るに同盟派は(即ちバクウニン派たる “L'Alliance de la Democratie Socialiste” を指す。筆者)此事を顛倒して居る。彼等は、無産者階級内部の無政府を以て、搾取者の掌中にある強大なる社會的、政治的勢力の集中を打破する最も確實なる手段であると宣言して居る。斯の如き口實の下に彼等は、舊社會が國際労働者協會を潰滅せんと努めつゝある瞬間に其の組織を無政府に依つて置き代へん事を要求して居るのである。國際的官憲はより以上を求めては居ない」(Postgate, Workers International, pp. 75-76 引用する所に據る)此書に於ける Marx の攻撃に關してバクウニンは次の如く書いた。「ゲダモクレスの社會民主主義を標榜する黨派の標語は今や「現在國家の内部に於ける權力の略取」であつた。獨逸國會の選舉に於ける此の黨派の最初の成功は彼等の希望を高め、結局社會民主黨が獨逸國會の多數を制し、適當なる立法手段で社會主義的民衆國家を形成するに至る可しと確信するに至つた。斯の如く政治上では中央集権主義的議會主義的合法手段を推舉し、經濟上では産業的國家的經營即ち國家社會主義を提唱する獨逸社會民主黨の傾向が、ラテン諸國の社會主義運動と次第に背馳し、従つて國際労働者協會の内部に於ける二派の分裂を一層顯著ならしめたのは當然であつた。(Kropotkin, Memoirs of a Revolutionary, p. 385 参照)蓋しバクウニン派は一切の權威の否定といふ立脚點より依然として權力的施設としての國家の徹底的破壊を提議し續け、眞の平等は人々の自由合意に依つてのみ實現せ

られるものであつて決して國家の法令や其の改革手段に倚據するものに非ずとし、且つ無産者階級の武器として政治的手段の無力と無効を述べ、政治的行動に於ける彼等の成功は畢竟國家權力の増大を招致して個人的自由を滅殺するものなりと觀じ、社會革命の唯一の有効なる手段は「行動に據る宣傳」にありと主張して居つたからである。

茲に於て兩者の懸絶は何等の互譲妥協の餘地を存しなかつた。而して一八七二年のハーグの大會に至つて、實にバクウニンの謂ふダモクレスの劍は、無産者階級解放の爲めに團結せる戰士の頭上に容謝なく落下せざるを得なかつたのである。バクウニンは此の大會に於て、評議員會の廢止、各分派の自治並に政治的行動の拒否を提案した。然るにマルクス派は Bakunia 並

に其の同志 Gushare の除名を履行し新く其

的革命家の心に深く浸潤せる一般の見解であつたと見る事が出来る。而して此の事情こそ筆者が既に再三指摘し、尙且つ進んで究明せんとする如く、當時の露西亞社會運動に於ける最も著るしき特色を呈示するものである。

五

既に其の社會上經濟上未曾有の壓制に對抗し此等の壓迫から無智と貧困に悩む此國の民衆を解放せんが爲めに、社會主義的革命主義の宣傳と實行とを経験し來つた露西亞の急進主義者等が、殆ど其の時期を同じうして勃興せる國際労働運動、即ち第一インタアナショナルの運動に對し、一齊に其の注意を集中するに至つたのは當然であつた。彼等は此の組織の中に労働者階級に依つて、全社會の利益の爲めに自由、正義及び平等の理想の實現を遂行する所の目的が横はつて居ると考へた。革命主義を奉せる幾多の

結果は國際労働者協會即ち第一インタアナショナルの分裂となり衰亡となつた。Kropotkin の記述する所に遵へば「マルクス派とバクウニ派との争闘は個人的の事柄ではなかつた。聯合主義の原理と中央集權主義の原理、自由共同體と國家の後見的支配、民衆の自由行動と立法に依る現在資本主義的狀態の改善、此等の間の必然的争闘であつた。其れはラテン精神と獨逸魂との間の争闘であつた。此の獨逸魂は、戰場に於ける佛蘭西の敗北後、政治上、哲學上の優越を求め、更に社會主義の上にも自己の社會主義的觀念を科學的と稱し、他の總ての思想を空想的 (Utopian) と稱して同様に其の優逸を求めたのである」(Kropotkin, op. cit. p. 386)

此の批評の正否は姑く措きマルクス派の主張に對する斯の如き嫌焉の情とバクウニンの思想に對する敬仰の念とは當時の露西亞の社會主義

亡命者の間に於ては勿論、露西亞本國の急進的青年の間に於ても、國際労働者協會の運動は概ね其の社會的、政治的討論の焦點であつた。(Kuleyeki, Geschichte der Russischen Revolution, Bd. I. S. 496) 彼等は最早や露西亞社會の緩慢なる漸次的進歩を傳道する Herzen の幻想に聽従しなかつた。Herzen は一八六六年以後の反動を目撃し乍ら猶且つ依然として其の樂觀主義を放擲せざるのみならず、一層強く其のストラツ主義的空想主義を固執して居たのである。然るに露西亞の社會運動は實に Herzen の斯の如き偏矯なる愛國主義的傾向を遙かに脱卻して、バクウニンの國際主義的無政府主義思想の影響の下に發達しつゝあつた。

國際労働者協會の分裂の結果は一層此の傾向を助長した。バクウニンの指導の下に一八七二年にチュウリツヒで組織され、且つジュラ同盟

に加入したる、而して國際労働者協會分裂後無府主義派に歸屬せるスラヴ人團體 (Slavische Sektion) は、バクウニン主義思想の普及に貢献する所が大であつた。其の綱領は全然無政府主義的觀念の表現である。其れによれば、一般的法律を上から下に向つて強制する所の中央集權的國家が、國家的組織なく抑壓的法律なくして下から上へ向つて形成せられる所の自由團體に對立せられる。更に綱領に依れば、其の團體員は唯物論者にして且つ無神論者である。彼等は實證科學を尊重し、又性による差別なき所の、全人に對する平等の教養を要求する。然れども如何なる種類の科學の支配も其は僭越にして有害なりとして斷然拒否する。スラヴ人團體は汎ゲルマン主義に反對すると同様汎スラヴ主義に反對し、又更に國際労働者協會其物の内部に於ける至上權の存在を駁論した。彼等は大會の多

數者に依つて議決され、且つ之を以て總ての團體に強要する様な一般的政治的綱領を否認した。(Kulczycki, a. a. O. SS. 505-506) 此等の團體の活動と相俟つてバクウニンの著作は廣く普及し、露西亞の社會状態に加へたる彼の精銳なる批判的見解は一般の革命的熱情を喚起した。然らば彼が露西亞の社會状態に對する批判並に此の國の社會運動に關する見解は如何なるものであつたか。

彼は一八七〇年の著作「科學と現在の革命運動」に於て、露西亞の現状を維持するに於ては人民の教養は概して達成し能はざるは勿論其の計畫は全然無意義である。何となれば政府は決して眞の科學に依つて人民を啓發し之に實際上の文化を賦與する事の出来ないのは勿論、其の辛うじて與へ得るものは死せる科學又は偏頗な科學であつて、それは人民の意識に、彼等を害し禍ひ

更に又社會力の平衡が移動せざる限り政府は變革せられ得ないとの結論を導き出して居ると。彼は此の理論に對して彼自身の見解を掲げ其れを以て歴史的事實の觀察に由來するものであると説明する。曰く、新しき社會力は協約に依つて作られ得る。活動の計畫も亦同様にして作られ得る。されば社會力の出來るだけ最も好都合なる分配は一定の計畫に準據して處理せられる事が出來ると。バクウニンは進んで國家の本質を説明し之を批判したる後、其の權力に對抗する爲めに先づ人民を結合し組織するの急務を述べて居る。彼は總ゆる國家は諸種の社會力の間の平衡の結果であるとの理論は之を承認するけれども、此等の平衡は民衆の組織に依つて動搖せしめらるゝに至る、而して其の結果は政府國家の如きもの、崩壊となるであらうと思念して居るのである。(Kulczycki, a. a. O. SS. 507-512)

する虚妄の概念を扶植するに過ぎないからであると述べて居る。斯くて露西亞に關する彼の論辨の出發點は、一般國家概念並に國家を以て人民の安寧幸福を保證するに最も適應せる手段なりと主張し、其れ故に國家は可及的強大なる可及的其の繁榮を致す可しと唱道する所の、國家改善論に對する鬭争の必要の力説である。彼に遵へば國家擁護論者の根本理論は次の三つの命題に要約する事が出来る。其の一、各國民は其の教養の程度に遵つて只其の國民のみが維持し得る所の政府を持つ。其二、總ゆる政府は人民の欲望の總計若くは一層よく言へば其の結合の表現である。其三、總ゆる政府は様々なる社會力間の平衡の結果である。而してバクウニンは言ふ、空論的革命論者は以上の命題から、或る一定の國に於て、其國民の教養程度が變革せざる限り、又國民の欲望が變化せざる限り、

更に又社會力の平衡が移動せざる限り政府は變革せられ得ないとの結論を導き出して居ると。彼は此の理論に對して彼自身の見解を掲げ其れを以て歴史的事實の觀察に由來するものであると説明する。曰く、新しき社會力は協約に依つて作られ得る。活動の計畫も亦同様にして作られ得る。されば社會力の出來るだけ最も好都合なる分配は一定の計畫に準據して處理せられる事が出來ると。バクウニンは進んで國家の本質を説明し之を批判したる後、其の權力に對抗する爲めに先づ人民を結合し組織するの急務を述べて居る。彼は總ゆる國家は諸種の社會力の間の平衡の結果であるとの理論は之を承認するけれども、此等の平衡は民衆の組織に依つて動搖せしめらるゝに至る、而して其の結果は政府國家の如きもの、崩壊となるであらうと思念して居るのである。(Kulczycki, a. a. O. SS. 507-512)

參照)

又彼が露西亞社會運動に對する根本的觀念は、一八七〇年七月十五日附、巴里在住の Lavrov 宛書簡に於て、彼自ら之を次の如く要約描出する所に依つて察し得るであらう。第一、無神論、實證的知識、濶達にして健全なる思索に基く非空論的科學による、一切の宗教、一切の信仰及び斯の如きもの、拒否。第二、總ゆる國家的現象並に國家形態の拒否、同様に法律上の所有權並に家族權の拒否、之に代ふるに共同労働及び共同財産の基礎の上に、經濟的に組織されたる組合、團體、郡、縣、州、國の自由聯合に依つて、下から上に向つて形成せられたる國際的制度を以てする事。法律的權利を廢し、之に代ふるに、各人及び全人の生活と最も完全なる其の發展とに對する、一般的人類的權利を以てする事。第三、此の原理に適應して行ふ所の、プ

はなく、人が抽象的ではなくて實際的に論じ様と欲する場合には必ず此の事を考量しなければならぬ。従つて又、社會革命主義の要求が概ね同一である事即ち其れが社會、制度及び人類の教化である事を承認するとしても、我々は同時に次の如く信ずる、此の要求を表現する形式は相異なる人民團體の場合に於て各々別箇のものとなるだらう。何故かと言へば、其れは專斷的に若くは個人や團體に依つて外國から移入されたる理想に依つて決定せられるには非ずして、各人民團體の各々の状態、特質及び歴史的準備に依つて決定せられるからである。第五、斯くて、我々の信ずる所に依れば、例へば西歐の都市的産業的文明の影響を蒙る事最も少なき露西亞並に或る二三の他のスラヴ、非スラヴ國(即ち匈牙利、南伊太利、西班牙)に於て、村落社會主義は遙かに都市社會主義に優逸して居る。第六、

ルジョアの(即ち特權的)個人主義に對する、又 Marx 並に全獨逸學派の強權的共產主義に對する容赦なき闘争、或る一つの革命的委員會により或る一つの中央集權的公的權力により上から下に向つて強制する所の國家社會主義に對する闘争、之に反して、常に益々人民の間に普及せらるゝ科學の影響の下に、而も又自ら同種思想と目的とに依つて結合し、出來るだけ廣く全土の上に撒布せられる所の秘密的革命團體 (Kryuk) の活潑なる理論上實際上の宣傳の影響の下に行はるゝ、労働多數者の獨立的發達及び獨立的組織の容認。第四、其の一切の人類學上、經濟上、歴史上及び文化上の相違や傾向や特質を包含する所の國民性は、我々の信ずる所では、一の權利や一の原理を形成するものではなくて、一の自然的歴史的事實を形成して居る。故に此の物から抽象する事は不可能である許りで

Comte の學説と共に我々は次の事を承認する、人は敢て事實、並に歴史に依つて結合されたる國民的狀態を無視する事は出來ないといふ事、此の事實と状態とは其れに内在する嚴然たる論理に服従し、其の論理は總ゆる個人や團體よりも強力であるといふ事を。併し我々は同時に個人及び團體の革命主義的宣傳及び秘密に協定されたる革命主義的行動の權利と利益とを承認する。其の論據とする所は、此等のものは恐らくは偶然の發生物ではなくて、同じ現實に屬し、此のものを形成し、且つ彼等の方法で發達し、加之此の事は團體及び個人が慎重に、眞摯に、何等の誇張なく、其の上に彼等の作用せんと欲する所の現實を理解して居るといふ條件の下に行はれるからである。第七、我々は現在の發達階級に於ける國家を以て、人民の生活行程の化石せる非有機的產物、即ち現實の人民組織の機械的

部分であると考へる。國家の力は現在では直接人民に對して指し向けられ、唯官憲と軍隊のみを其の基礎とする所の純然たる機械的の力に過ぎない。故に我々は革命主義的團體及び個人の一切の努力を誘導して、人民の原始力の組織を以て國家を破壊するの仕事を成就せんとするのである。第八、従つて我々は露西亞に於ける實際的進歩の第一條件として、全露帝國の破壊を提案する。……以上は我々の綱領の基調を成す諸點である。……」(Max Nettlau: Bakunin und die russischer revolutionäre Bewegung in den Jahren 1868-1873. Carl Grünberg; Archiv. V Jahrg. SS. 403-405)

六

佛蘭西革命以後の西歐諸國の重要な事件を論評したる一八七三年の著述「國家と無政府」(Gosudarstvennost i Anarchija)(註)に於て、バク

味化されて居る。其一是、人民の間に優勢なる家長權的風習であり、其二是、個々人が露西亞經濟的共同體(即ち Obshchina)の中に融解されて終つて居るといふ事であり、第三は、人民の皇帝(Tsar)に對する信頼之である。而して彼は此等の特質に附加するにキリスト教的信仰を以てする事が出来ること述べ、進んで次の如き見解を披瀝する。此國の宗教は西歐に於ける加特力教や新教とは違つた特長を持つて居る。露西亞に於ては人民の宗教的信仰は大體主として貧困並に物質的不幸の結果であるから、即ち教會は人民にとつては云はゞ天國の居酒屋の如きものであるから、従つて社會革命に依つて掃蕩せらる可きものである。露西亞の革命的社會主義者は人民の蒙昧を啓發して總ゆる空虚なる宗教上の信仰を一掃しなければならぬ。更にバクウニンが前記三箇の特質に關して説明する所に依

ウニンが上述の見解に遵つて露西亞の社會を批判し、考察し、此國の革命的社會運動の指針を提示せる部分を見出す事が出来る。其の要旨に遵へば、革命的戰端を開始し其の成功を達成するが爲めの條件として、實に民衆が不幸窮乏の狀態に不満である事を以て足れりとす可きではない。彼等は更に一の社會的理想といふ様なものを保持しなければならぬ。然るに露西亞の人民は正に斯の如き理想を有して居る。それは人民の次の如き見解の中に横はる。(一)、土地は全人民に屬す。(二)、土地に對する權利は私人に屬せずして共同體(Obshchina)に屬し、土地は利益期間の方法に依つて其の團體員の間に分割せらる可きものである。(三)、共同體は完全なる自治權を有し此事に依つて國家に對立する。併し乍ら又バクウニンの觀る所に依れば、露西亞國民の此等の理想は三箇の特質に依つて甚だ曖

れば、家長權的習慣に對する鬭争は全體に亘つて既に初められて居る。又農奴制度廢止後に於ける誤れる土地分配法、並に、既に與へられて居た以上の何等の自由をも賦與する事なき永遠の保障に依つて、皇帝に對する信頼は次第に人民の間に衰亡して居る。最後に個々の經濟的共同體は、一般的叛亂の爲に人民を組織するに際し大なる障礙となつて居るけれども、併し斯の如き叛亂の全然不可能に非ざるは既にステンカ・ラーヂン(Stenka Razin)或はプガチエフ(Pugachev)の農民運動が之を證明して居る。故に今日最も緊要とする唯一のものは大なる活動力である。我々は幾多の熱情と訓練とを合體せしめ、人民其物と彼等の欲望とを充分に理解し、而して先づ個々の共同體間の結合を完成し然る後に一の組織を實現しなければならぬ。個々の地方的擾亂は民衆を教育するに役立つ。而も實際

上人民を解放し得るものは、組織的計畫的に實行されたる一般的叛亂あるのみである。(P. 514-515) czycki, a. a. O. SS. 514-515)

バクウニンの伶俐なる洞察力は、當年の露西亞に於ける經濟的進歩の遲緩並に其の結果たる政治的知識的進歩の停滯の最も重大なる原因を看破して居た。此等の遲緩停滯の主因は、個別の經濟的共同體の存在といふ特殊な經濟状態に存するものであつて、此の状態は西歐諸國に比して生産力の發達程度未だ遙かに低きにあるの自然的結果である事を彼は認容して居る。然らば急速なる資本主義的發達のみが結局露西亞の村落生活乃至露西亞の全生活の經濟的條件を根柢から變革せしめ得可き理であり、其の任務を遂行し得可き階級は同じく資本主義的經濟組織の産物たる無産勞働者階級其物に非ざるやと言ふに、彼に於ては全然斯の如き Marx 流の解

の必然性に盲目なりしとのみ非難するは失當にして、寧ろ此點に所謂ナロドニキ的社會經濟思想の論據と其の效績とを洞見しなければならぬであらう。

兎もあれ、バクウニンが叙上の著述を公刊しつゝ、ありし七拾年代の初頭、即ち一八七二年より七三年の交、彼の頻繁往來せる瑞西就中チューリックには幾百の露西亞の革命的青年が集合した。彼等は擧つてバクウニン主義を信奉し、其の革命思想は彼等を仲介として本國に移植され其國の社會運動に絶大の影響を及ぼすに至つたのである。當時の一青年の回想録は之の事情を次の如く述べて居る、即ち彼は國際勞働者協會の二傾向、即ち社會民主主義と無政府主義との本質を解明したる後に曰く「此等相反する二個の命題が露西亞の青年の前に置かれた時、彼等の大多數は無政府に對する賛同を表明した。

釋に同する事なく、飽く迄も根本的、總破壞的革命的變革の結果として生ず可き此國の飛躍的な社會的進歩の可能を確信し、且つ露西亞の舊社會秩序を覆徹す可き主力は此國の農民にありとの信念を固く抱懷して居たのである。凡そ斯の如き見解は、一般に、當年の革命主義的運動に於ける、並に其の根本的觀念に横はる誤謬の最大なる點として指摘せらるゝ所なれども、當時内外の熾烈なる革命的社會運動相呼應し相交流し、社會主義的社會革命は直ちに其の實現を招來し得可しとの樂觀的氣運著るしく隆盛なりし露西亞に於て、此國も亦必然的に資本主義的發展の道程を経由す可きものであるとの信仰を喚起するに足る充分なる經濟的現象未だ存せず、加之都市無産者階級の如きは數に於ても勢力に於ても殆ど何等重大なる意義を有せざりし事情を想起するならば、之を以て彼等が社會的發達

……此事は我々露西亞人が國家の干渉に倦怠して居たといふ事、我々が國家を以て進歩を助長するよりも寧ろ進歩の敵であると認めて居たといふ事、更に又我々は國民議會を有せず、我々の代表者を送る如何なる場所をも有しないといふ、此等の事實に起因して居る。兎に角殆ど總てものが無政府主義理論の賛同を言明したのである」云。(Debogory-Mokrievich: Reminiscences (St Petersburg, 1906) p. 81. cited by Mavor, Economic History of Russia, vol. II, pp. 99-100) 前述し來りし所と甚だ重複するの嫌あれども、Rabinovitz が其の著「露西亞に於ける勞働運動の發展」に於て此等の諸事情を總括し約言する所の一句を引用するならば、「バクウニンは露西亞無政府主義の眞の建設者であつた。彼は又意見の根本的相違に依て Marx と分れる迄國際勞働者協會に於ける無政府主義を代表して居た。

Marx が民衆運動に依つてのみ其の目的を達成せん事を求め、其手段として現在國家内部に於ける権力の奪取、議會主義及び工場立法を承認するに反し、バクウニンは一切の議會主義的活動を拒否し恐怖手段に賛同した。哲學上の假説に於ても亦根本的に相違した。歴史的唯一論の創設者 Marx が經濟的關係を以て精神的發達の基礎なりと考察する(即ち「實在が意識を條件付ける」と云ふ)に反し、バクウニンは「民衆の感情即ち一の主觀的要素が歴史の原動力であつた。(彼の場合には意識が實在を條件付けると言ひ得られる)。更に又バクウニンは聯合主義を主張し、Marx は中央集權の大國家形態を主張した。—バクウニンは一八七二年國際労働者協會脱退の後、他の無政府主義「インタアナシヨナル」を建設した。爾來 Marx 派「インタアナシヨナル」の露西亞人分派は全く其の意義を失ひ、

露西亞革命主義に對するバクウニンの影響は益々顯著となつた。露西亞青年の從來の指導者 Herzen は其の影を潜めた。無政府主義思想に深く培はれた革命主義者等は、農民の叛亂と政治權力の直接的篡奪を夢想し、露西亞の平和的發達に關する Herzen の見解を非認して「行動に據る宣傳」を高唱した」云。(Rabinowitz, Zur Entwicklung der Arbeiterbewegung in Russland. SS. 39-40)

併し筆者が嘗て指摘したる如く、バクウニンは革命運動の手段として必ずしも其の學徒 Nechaev の意味に於ける「行動に據る宣傳」を推擧したるものではなかつた。(前掲拙稿、本誌第十八卷第九號一四四—一四六參照)例へば「國家と無政府」に於て彼は革命運動を實行し新社會秩序を實現するための條件を準備し得可き二つの方法を擧げ、其の一は當然民衆の革命的組織と其

の一般的叛亂とであるが、第二のものは古き Kunkator (Fabius Kunkator より出でたる)の方法、即ち徐々に人民の間に宣傳し、或は未來の社會的經濟組織の豫備として協同主義的組合を建設する事之であると言つて居る。(Kulczycki, a. a. O. SS. 517-518)又彼は其の中に於て、「社會革命主義を奉ずる人々は何等の躊躇なくして民衆の中へ行かねばならない。何となれば今日一般に、殊に露西亞に於ては、民衆を除外して、即ち勞苦しつゝある幾百萬の大衆を除外して何等の生活、何等の問題、何等の將來も存在しないからである」と言ひ、再び「民衆の中へ行く」(Idi v Narod)事の急務を提唱して居る。(Max Netlau, a. a. O. S. 419)實に露西亞の當年の革命的知識階級は、直ちに專制主義的壓制を破壊して自由聯合的社會を建設す可しと高唱するバクウニンの力強き主張に傾聴すると共に、其の思想の

宣傳の爲めに「民衆の中へ」趣き「民衆と近く接して民衆と融合する英雄的行動」に依つて鼓舞せられたのである。(Masaryk, op. cit. vol. II. p. 305 參照)

併し乍ら革命的社會運動の此等の手段方法の問題は勿論當時の激しい論争の焦點であつた。就中此點に關してバクウニ派とラゾロフ派とが對立した。(Steklow, Mikhail Bakunin S. 117)後者は社會主義的運動の窮極目的としての國家の破壊を承認せるも、其の前提條件として先づ人民の間に社會主義的觀念を宣傳し、且つ漸次に勞働階級が社會革命の爲めの準備を爲す可き事を懲憚した。茲に於て筆者は或點に於てはバクウニンの思想と交流しつゝ、或點に於ては之と背馳しつゝ、露西亞社會思想史上閑却す可らざる獨自の地歩を占むる所の主觀主義學派の思想、即ち Lavrov 並に Mihailovskii の學說の主要

を視ひ之が露西亞社會運動との關係に言及するであらう。

(註)、一八七三年の四月頃バクウニンの徒黨がチュールロで露西亞印刷所を設立し、大著「社會革命黨の任務」(“Izdatie socialno-revoljucionoi Partii”)全三巻の印刷に従事した。「國家と無政府」は其の第一巻として同年末に刊行せられたものであつて、露西亞の社會批判及び露西亞社會革命主義者の任務に對する説明は同著の附録として書かれて居る。本文の引用は此の附録から Keyzylki の採録せるものに據る。

猶ほ之に先ちて同年八月末に刊行されたる第二巻「インマアナシヨナルの史的發展」(“Istoricheskoe Razvitie Internatsionala”)は概ね Guillaume の觀念に違つて集録せられたる、インマアナシヨナルに關する重要な文獻の翻譯であつた。又其の第三巻は「一八七四年の「プルードンの無政府主義」(“Anarchija po Proudon”)である。之は集産主義的無政府主義の立場からプルードンの學說を説明し批判したものであつて Zaitsev による Guillaume の著作の翻譯であるけれども、其の草稿はバクウニンに依つて閲讀せられ、隨處補綴訂正せられたものであると言はれる。

七

の苛酷なる權力の下に反動的壓迫の怒濤が澎湃として知識階級の中に亂入せる時、(前掲拙稿、八巻第九號)彼も亦何等政治的陰謀に加擔せるの證據なきに拘らず、文筆上の秘密活動恐らくはニコラス一世及び歴山二世を攻撃せる作詩並に Cernyševskii 及び Mihalov との個人的關係ありしとの理由に依つて逮捕せられ、フログダに幽閉された。一八六八—九年 Mitrov の假名の下に雑誌 Nedelja (week) に初めて發表されたる其の著名なる最初の社會學的論文「歴史的書簡」は其處で書かれたものである。ラヴロフの此の「歴史的書簡」は正に時宜を得たる著作であつた。蓋し當時の青年は民衆の間の活動に對する新しい綱領を求めつゝあつたからである。彼は此の著述に於て斷然民衆の間に於ける活動の宣傳者としての自己を示して居る。即ち彼は豊富なる歴史的暗示と哲學的推論と實際的勸告とを

を以て、Herzen の渾然融合せしめたる其の論文の形式に於て、教養ある青年が民衆に對して負ふ負債と彼等が貧民階級に對する債務償却の義務とに就て語つた。其の所論は露西亞の青年に深甚なる影響を與へた。そしてラヴロフは一八七〇年に傳道した其の思想を自ら爾後の生活に依つて確證したるものであつた。

さてフログダの幽閉の地を脱し、Herzen の招きに應じて一八七〇年三月巴里に亡命したラヴロフは(因に、ヘルツェンは彼の到着を待たずして同年一月巴里に病没した)聽て自ら國際労働者協會の一員となり、バリロミュンの暴動に參畫し、且此運動の援助を求むるため白耳義並に倫敦に派遣され、而して倫敦では Marx 其他大陸の亡命者等との知己を得た。一八七三年より同七六年迄彼は革命主義雜誌“Vpered”(前進)の發行者であつた。然るに彼は其間次第に Bakunin 並に其の學徒と離反するに至りたる

のみならず、同七六年には其の支持者をも失ひ、「Vpered」も亦遂に他人の手に委ねられた。其後六箇年、彼は新「土地と自由」黨及び「人民の意志」黨(«Narodnaja Vozja»)の如き革命主義的結社の圏外に立ち、就中後者の戦闘方法に對する反抗の態度すら示して居たが、歴山二世の暗殺以後再び進んで活動的の革命主義黨派の隊伍に參じ、「人民の意志」黨の戦闘組織の増大に貢獻した。而して斯の如き革命主義的活動の理由の下に暫時佛蘭西より追放せらるゝや居を倫敦に轉じ、此處に於ても亦彼は「人民の意志」黨と其の氣脈を通じて此の黨派の機關雜誌「Vestnik Narodnoi Voli」(「人民の意志の傳令」一八八三—一八八六年)の協同發行人となり専ら露西亞專制主義の攻撃に従事した。既に理論的方面に於いて浩瀚なる著作を公にしたる彼は九拾年代

した。一九〇〇年七拾七歳の高齡を以て巴里に客死、其の葬儀は各國の社會主義黨派の代表者と各國民數萬の參列を得て未曾有の盛觀を呈したと傳へられる。(Sack; The Birth of Russian Democracy. pp. 180-186. Masaryk; The Spirit of Russia Vol II. pp. 116-117. Kropotkin; Russian Literature. pp. 300-301. Kulczycki. Bd. II. SS. 25-28)

八

於ては更に露西亞革命史に關する文獻に執筆する企てがあつた。彼が同時代の思想家と同じく先づ Hegel の哲學に没頭し、更に佛蘭西社會主義者の著書に親しめるの一事は既に之を記した。然るに彼は遂かに他の思想家を超絶して Darwin, Comte, Spencer を學び Feuerbach より轉じて Kant に歸つた。かの Čerňevskii が同じ哲學的學說より出發して同じ問題を考察論議するに當り、専ら實證論的唯物主義並に功利主義の見解に賛同したるに對し、ラヴロヴは假令實證論的唯物主義と功利主義とは之を放擲する事なかりしと雖も、著るしく Kant の足跡に追從して居るのである (Masaryk. op. cit. p. 116)

洵に彼は「人類學主義」(Anthropologism)の名の下に近世自然科學の唯物主義とカント哲學との調和を企てたる哲學者であり社會學者であつた。(Kropotkin, op. cit. p. 300)然らば斯の如き企圖に於て客觀的方法に對立せしめたる彼の主

凡そ露西亞の特殊なる政治的社會的狀態に依つて、此國の社會運動は常に強力なる革命的闘士を其の前線に立たしめざるを得なかつたものであつて、露西亞の革命的社會主義は其の全歴史を通じて著るしく個人主義的色彩を帯びて居る。ラヴロヴは個人主義的社會主義者の典型であり、其の學說は斯の如き一見矛盾撞着を極むる個人主義的社會主義を合理化する企てである。觀的方法とは如何なるものである乎。以て社會的批判の要具となせる其の主觀主義學說とは如何なるものである乎。少しく其の概要を左に描出して見様う。

彼の所說に依れば、社會學並に歴史學に於ては他の總ゆる科學に於けると同様の絶對不變の眞理が存在する。此等の眞理は客觀的のものであつて或時代に於ては知られないが他の時代に於て見出され得るものである。併し社會學並に歴史學は或時代以前には見出され得ない所の他の眞理をも亦含んで居る。此の事は何に起因するかと言ふに、それは見出さる可き材料が客觀的に不充分であるからではなくて社會が問題を現實の姿に於て了解するに主觀的に不用意だからである。「思想史に於ける諸經驗」(九二—九三頁)歴史は繰返すことなく、又社會的協同心の法則や歴史的進化の行程は何等か不變のもの

のではなくて、自ら進歩するものであると彼は主張する。此等は神の啓示に従つて絶對的に存在する客觀的眞理ではなくて、歴史的進化の一定階段に於て現はれ、従つて其の時代の人々に依つて主觀的に認識せられるものである。故に此の重要な要因を「甚だ必要な且つ充分科學的な主觀主義」として承認する事が必要となる。

(前掲書、九四頁、Hecker: Russian Sociology. pp. 88-89)

彼は嚴肅なる諸法則を不可能ならしむる所の歴史の千變萬化を力説するのみならず、如何なる社會的研究にも避く可らざる社會及び個人の進化の要因を論じて居る。曰く「科學的構造は等しく主觀的なる二つの行程の協同作業に依つて得られる。一は歴史家の心の中に起る行程であり、他は歴史上の個人及び團體を觀察するの

的に研究し、斯くて進化の行程に於て個人及び社會の爲めに最も重要であり、且つ人類の進歩を促進する様に思はれる所の諸要素の基礎の上に、彼の進歩の理論を建設する事を希望したのである。此の主觀的見解と主觀的方法とは、個人が社會の唯一の眞の要因である事を示し、個人及び個人の利益を無視する事は最も重要な社會現象を無視するに他ならないといふ事を明にするものである。(Hecker: op. cit. pp. 89-90) 一言以て覆ひば、彼の主觀的方法とは必竟個人の十全無障の發達を目標として、歴史をば倫理的、目的論的見地より考察する事を意味するものであつた。

さて彼が社會學的考察に據つて自ら其の解決に努力したる根本問題は、全歴史を通じて動いて居る二個の相平行せる行程—社會的協同心の生長と個性の生長—である。彼は此の研究の爲

は多少客觀的事實の撰擇に影響する所の主觀的立脚點に立つ事に依つて社會の客觀的研究を卑屈にも回避し様うとしたのではない。唯彼は附加的事實の考察を要求した。即ち歴史的事實の理論的考察と共に、人は倫理的關係に依つて結合されて居るといふ事實の考察を要求した。換言せば彼は常にアリストートル流に「如何にして」「如何なる方法で」と尋ねるのみならず、「何處から」又「何處へ」といふ問題を考究するの必要を確信した。此の社會學の目的論的形相はラヴロフには甚だしく重要に思はれた、蓋し當年の露西亞の多くの學者と共に、彼も亦社會科學は人類の幸福を獲得せんとする闘争に貢献するものでなければならぬと信じたからである。併し彼は人類が其の爲めに努力する所の窮極の理想を *Prosa* の形式で表はさうとは思は

ぬに、有樣的生活の最も簡單なる形式に遡り此處より出發して、社會的動物たる人間が自意識を得て彼自身の將來を自己の批判的能力に依つて導かんと試みるに至る時代に迄、研究の歩を進めた。彼の見る所に依れば、歴史は社會的協同心或ひは團體的利益と個人的利益とを調和す可き不斷の計畫を示す所の思想の發達の記録である。社會は、彼が進歩と呼ぶ所の此の道德的善を獲得する積極的努力を始めるのである。例へば次の如く言ふ、「斯くて社會學は社會協同心の諸形式を研究し、且つ此等の形式の質的及び量的變化の間に生ずる諸々の行程を了解する事のみを以て其の任務と考へずして、更に進んでそは必然的に、一度理解せられたる所の斯の如き形式を創造するといふ實際的問題の實現に努力するものである。其の爲めには、先づ第一に、實際に理解されたる形式の實現の可能なる事、第

二に、其の社會學的意味を理解したる各個人をして彼等の抱懐する所の確信を發表せしむる事が必要である。社會學の諸問題を實に理論的解釋に於てのみならず、更に實際的意味に於て、理解する事は各個人が自らの行動の判斷を可能ならしむるものである。〔思想史に於ける主要時期〕九八〇—九八一頁、Hecker, op. cit. p. 92) 概ね斯の如き見解を中心として彼の思想體系は根本的に三大部門に分たれる。第一は、社會的協同心の理論又は社會的統制論、第二は、個性化論又は人格論、第三は、社會進歩論である。而して其の學說體系に於て社會的協同心が「*Life*」であり、個性が「*Antithese*」であり、此の兩者の綜合が即ち社會進歩論の全主題となつて居るのである。筆者は次に其の社會進歩論の内容に潛入して彼が社會批判の根底を窺ふであらう。

の動因を要求する場合に、其の社會的秩序及び社會的環境に對して此の理論が適用されるのである。〔同上三〇八頁〕然らば人類の歴史に於て進歩は如何にして成立したか。又如何にして成立し得たか。ラヴロフに據れば、茲に自ら次の如き三箇の問題が生ずる。其一、生物學、心理學、社會學の今日の材料に基いて考察すれば、人類社會に於ける進歩は如何にして成立し得たか。其二、分類せられ探究せられたる歴史的材料に基いて考察すれば、歴史の進歩の各階梯は如何にして成立したか。其三我々の直接觀察し得る充分近き社會及び合理的活動を爲しつゝある幾多の現存團體に基きて考察し、又現在社會秩序の歴史的起源並に歴史上の進歩の主要なる現象をも併せ考ふるならば、現代の可能なる社會的進歩は如何にして成立するか。〔同上、三三二頁〕

ラヴロフの見解に依れば、進歩理論とは「自ら其の歴史的発展の中に現はれて居る所の社會學の諸問題に、倫理的發達の自然法則を適用したるもの」である。〔歴史の書簡二一九四頁〕進歩は必ずしも一の經續的運動であるを要しない。「唯、窮極目的としての進歩の見地から歴史的運動を評價することが必要なのである。〔同上、二九六頁〕故に進歩理論は二個の問題を提供する。一は理論問題であり、他は實際問題である。進歩の爲めの闘争に参加する事は、既に進歩の意味を理解して居る所の個人にとつては一の道德的義務である様に思はれる。此の義務を履行する爲めには一の行動の綱領と將來達成せらるべき目的に就ての一の理論とを必要とする。〔此の理論は自然的行程としての、及び眞箇の歴史的現象としての、進歩の實行を基礎づけるものである。即ち社會が其の實行的活動の爲めに進歩

彼の所論に遵へば進歩の要因を構成する二個の行程が存在する。曰く「我々の眼前には其の技術的發明、科學的成功、哲學的建設、藝術的創造並に道德的效績を伴へる個人的思想の成長が存在する。然るに又其處には『各人は全人の爲めに、全人は各人の爲めに』といふ、換言せば生活と發達の必要品を全人に賦與し、各人は其の全力を盡して社會的幸福、社會的善及び社會的發達の仕事に従事するといふ、主要原則を伴なう社會的協同心が存在する。同上、(三三二—三三三頁)斯くて若しも意識的個性化の行程が進歩の要因であるならば、個性化を促進するに役立つ諸條件は社會的に是認せられねばならぬ。他方、團體を構成する所の個人の幸福に對しては強き社會的結合が必要であるから、從つて社會的協同心を促進する所のもは又總て進歩の要因である。故に理想社會といふものは、

社會の單位が同様の利害、同様の確信を有し、平等の文化状態の下に生活し、出来る限り總ゆる攪亂的諸要素を排除し、且つ彼等の間に於ける生存競争の一切の法則を禁止する時に於て實現するであらう。(Hecker; op. cit. pp. 111-113 参照)

要之、彼に於ては社會進歩の法則は大體次の三つの定式より成るものである。

一、進歩とは其の時代の文化に向けられた個人の批判的思想の助けに依つて、人類の間に、意識と眞理と正義とを發達せしめる行程である。

二、進歩とは個人の肉體的、知識的及び道德的發達の、又眞理と正義との社會的形式に依る實現である。

三、進歩とは個人的意識及び社會的協同心の發達である。

る。洵に Karl Marx の如きも、歴史は人間に依つて作られると觀じ乍ら、彼の實際的探究の目標は、客觀的行程即ち或る歴史的及び社會的原因が如何にして或る社會的變化或る社會的變革を引起すかといふ事、一層精密に言へば、生産方法の變化が如何にして階級闘争に影響し且つ社會的變革を惹起するかの事實にありしを以て遂に個人の歴史的社會的任務に關して何等説く所がなかつたのである。實に社會主義をばその空想的理想論の玉座より失墜せしめて確然たる科學的基礎の上に樹立し、社會主義的社會の實現は社會進化の自然的必然的歸結に他ならずとせる彼にとつては、社會主義は果して人類の幸福を齎すか、社會主義は果して個人の利益及び性質に適應するかの如き問題は假令之を無視し看過する事なかりしとするも、否假令甚だ重大視したりとするも、而も猶、甚だ之を等閑に附せる

之を要約するに社會進歩とは個人の意識的行程及び理性的活動の動機を阻害しない範圍に於て、社會的協同心の發達と強固とにある。又進歩は同様に、個人の最大多數の間に協同心の發達と強固とを阻害しない範圍に於て、個人の意識的行為及び理性的活動の不斷の發達に於て成立する。故に進歩とは社會的協同心及び個性といふ二個の社會力を調和し綜合する事である。(「歴史的書簡」三三九頁 Hecker; op. cit. p. 114 & p. 117)

假令、彼が現在經濟組織及び政治形態の社會主義的改造を最大急務と考へ、哲學體系、藝術の典型及び道德的理想等も各々此の改造を助長する如くに解釋せらる可きであるとし、又自ら社會主義者なりと稱したけれども、如何に Marx 流の社會主義を距る事が遠かつたかは彼の社會

進歩理論の要旨を一瞥する事に依つて明かである。蓋し止むを得ざる所であつたであらう。彼が科學者として取扱つた問題は生産力發達の問題であり經濟的進化の問題であつた。然るにラヴロフは全く之に反する。彼の語る所は唯進歩と個人的發達とである。彼にとつて社會的進歩とは唯個人が其の十全無障の發達を實現するの手段に過ぎなかつたのである。換言せば其の社會理想とする所は、個人の意識的行為及び理性的活動の最も強大なる飛躍と擴張とを許容する社會の實現に他ならなかつたのである。之れ即ち彼が經濟的要因の重大なるを主張し乍ら唯物主義的決定論者たるに至らず、彼の社會主義が畢竟其の所謂社會的至上命令より發生する倫理觀の上に建設せられたる所以である。

以上に依つて、ラヴロフに於ては個人が人類進歩の到着點なりし事明白であるが、彼は更に個人を以て其の出發點であると思念した。即ち

彼は社會進歩の原動力を批判的に思考する個人に求める。彼に依れば批判的に思考する個人こそ、現存社會形態を破壊し、新社會形態を創出し組織する所の分解力である。斯の如き個人は正型(Norm)の中より出で來れる變型(Variant)である。有利なる條件の下に於て、彼等を中心として、其の周圍に、新しき集團形態が形成せられるのである。社會的進歩は正に彼等の創意と活動とに依つてのみ達成し得られる。畢竟、歴史的决定の原動力は個人の有する思考及び意欲の力である。〔「歴史的理解に於ける諸問題」一〇頁以下、Hecker; op. cit. pp. 109-110) 批判的に思考する個人のみが傳統的文化を完成し、人類の蟻塚より人類の社會を形成する事に依つて、歴史を作る。批判的に思考する個人は歴史を進展せしめ、活動せしめ、斯く行ふ事に依つて單なる進化を變じて進歩的ならしむるのであ

る。(Masaryk; op. cit. p. 123)

茲に於て批判的に思考する個人が社會的進歩の爲めの闘争に於ける任務は又自ら明かである。先づ第一に、彼等は、進歩に向つて其の同胞を教育し、啓發し、自ら傳道普及に盡瘁しなければならぬ。第二に、彼等は組織的進歩團體に結合しなければならぬ。謂へらく「啓發せられたる個人は多數者の幸福の爲めに知識と文化とを普及し、斯くて多數者各自の個性化と文化とを可能ならしむ可き所の責任を負ふて居る」云々。〔「歴史的书簡」九〇頁、Hecker; op. cit. p. 108) 而して最後に、進歩的團體を組織する者は理論的にも實際上にも共に正しき生活方法の典型でなければならぬ。ラヴロフは人類愛の思想を根本的教義として認める。生活は人類愛の道德への奉仕である。併し乍ら更に進んで生活は自己犠牲性を要求する。進歩の爲めの闘争は

道德的義務として個人に課せらるゝ所のものである。我々は茲に其の初め「人民の意志」黨の過激手段を排し乍ら結局其の陣營に參畫し、恐怖主義的行動を賞讃せずとも猶且つ之を默認し、又レオ・トルストイの無抵抗主義に抗爭して暴力手段の例外的使用を道德的に是認したるラヴロフの舉止を理解し得るであらう。

十

ラヴロフの社會主義は本質的に Kant の人道的觀念—人類愛と人類の威嚴を基礎として構成せられと居る。人類、生命及び犠牲は彼の人道主義の闕域であり正義と眞理とは彼の二大要求である。理論的には眞理に對する希望、實際的には正義のための闘争、之れこそ發達せる個性の義務である。正義とは自らの個性の権利と同様に他の個性の権利をも等しく尊重する事であると認められる。彼は Marx との交遊淺からざ

りしも遂に後者の唯物史觀並に其の極端なる客觀主義を承認する事がなかつた。彼は前後一貫主觀主義學説を信奉した。

更に其の國家觀に於て彼は Marx 派と著るしく乖離する。ラヴロフに依れば國家は單に過渡的意義を有するに過ぎない。社會主義の主要なる任務は國家に對する闘争であり、社會革命は國家に對して向けらる可きである。蓋し彼は國家の起原は一の契約に存するとの陳腐なる學説を承認するも、彼の解釋する所は、法律を其の形式上の表現として保有する所の社會契約は絶對的結合として認められ得ないといふにある。彼にとつて國家は人々が確信なしに承認したる外部的秩序に過ぎない。換言せばそれは各個人に依存する事なき致命的諸條件の無反省的承認である。此の事に依つて、其の初め單に物質上の強制的秩序に過ぎざりし國家は、爾來道德上又は

宗教上の強制力となつた。進歩の目的は國家の勢力を最小限度に減殺する事にある。即ち近世科學的社會主義の努力は此の目的を達成する事に存す可きであり、斯くて教會の變形としての國家の社會的規律を廢止しなければならないものである。彼は總ゆる國家形態に於ける中央集權主義に反對し、將來の社會秩序は地方自治體及び同業組合の聯合組織に依つて形成せらる可しと觀じた。(Masaryk; op. cit. pp. 128-129)

参照)

斯くて、實踐的社會主義の問題を論ずるに及んで、彼も亦當然、かの終局は自國に於ける特殊な社會的經濟的事情の領域に復歸せざるを得なかつた所のナロドニキの思想の範疇から脱卻する事甚だ少なかつたもの、如く考へられる。彼も亦先哲の足跡に追従して村落共產團體 (Mst) 及び同業組合 (Artd) を基礎として發達す可き

就中彼自ら社會民主黨に屬し乍ら獨逸社會民主黨の中央集權的社會主義國家の理想を排して國家の否定を高唱するの點に於て、Bakunin の無政府主義思想との一脈の交流を見るけれども、更に彼の歴史的現實主義の立場、其の徹底的なる合理主義的反宗教的見解に於て、將又其の倫理的根據の考察に於て、直接 Cernyevskii の影響のより深遠なるを認めざるを得なうであらう。後の機會に關説する所ある可なり。"Vpered" に於ける綱領に於て、我々は彼が其の歴史的現實主義を以て神學及び純正哲學と嚴密に對比せるを見る。又彼の社會主義的至上命令の眞意が Cernyevskii の「何が爲さる可き乎」に於ける現實主義者の性格の中に其の創意の端を發せるものあるを瞥見する。

要之、ラゾロヅの主觀主義學說も、亦吾人が前述し來りし其の所說の内容に依りて略々察知

社會主義的新社會組織の建設の可能、即ち西歐諸國の經驗したる資本主義的社會組織の弊害を回避し得可き此國の飛躍的なる社會的進歩の可能を信じ、又知識階級が進んで農民の間に社會主義的思想の宣傳に趣く可き事を慫慂した。彼は革命的ナロドニキの宣傳を以て露西亞社會主義の使命を完うするものであるとして熱心に之を賞讃した。彼は又人民の間の宣傳はピーター大帝の時代に其の端を發した露西亞の文化並に歐羅巴化の論理的經緯であると觀じた。「民衆の中へ」(Vnarod)の運動は彼にとつては四拾年代の人道主義的理想主義の結實であり、就中 Cernyevskii 及び Disarev の熱心なる唯物主義及び現實主義の結實であると考へられた。(Masaryk; op. cit. p. 131)我々はラゾロヅの思想が其の個性の絶對的尊重の立脚點に立つ事に於て、又容易に唯物主義的決定論に替せざるの態度に於て、

し得る如く、畢竟當時の露西亞に於ける社會的政治的運動に依つて刺戟せられ條件附けられて居るのみならず、其の意圖も亦專制的獨裁政治に對して鬭争せる急進的分子を是認し、彼等の運動に科學的根據ある一の綱領を供給せんとするにあつたのである。彼が以て社會進歩の原動力となせる所謂批判的に思考する個性とは、彼の學徒たりし當時の露西亞青年革命黨員を指稱せるに他ならざりしが如きは甚だ興味多き事實である。勿論此等の傾向から離れて、彼の學說に於ける不朽の眞理は廣く一般に認められて居る。惜しむらくは彼の學說體系は未だ完備したるものではなかつた。蓋し其の卓越せる幾多の著作と雖も、不幸完成し得ざりし大著「近代思想史」の序篇に過ぎなかつたからである。

十一

露西亞史に所謂 "Sturm und Drang" の時代

と呼ぶる可き時期は露西亞主觀主義學說の誕生を招致したるものである。(Hecker; op. cit. p. 119) 此の學派の創始者たる榮譽は前記 Lavrov に歸せらるゝ所なれども、彼と共に主觀主義學派の双壁を成すミハイロヴスキイの著書は又廣く閱讀せられ、其の社會學說及び倫理學說は當時の思想界を風靡した

ミハイロヴスキイ(Nicolai Konstantinovič Mi-hailovskii)(一八四二—一九〇四年)は一八六〇年初めて其の文筆的活動に従事してより其の晩年に至る迄、専ら科學的哲學的研究に没頭し、且つ科學の普及に盡瘁したる人であつて、假令彼は一般に當年の露西亞社會運動の指導者と認められ、其の峻烈なる批判的見解は痛く政府當局の畏怖する所なりしと雖も、而も約半世期間、不遇なりし其の同僚 Černyševskii, Lavrov, Kropotkin 等の如き運命に遭遇する事なくして此の

の一致を理想とする所謂ブラヅダ主義なるものにして、其の所論の以て味ふ可きもの少なからざれども、其の社會學說並に倫理學說の詳細に亘りて記述するは本稿の目的に非ざるを以て、茲に於ては僅かに彼の社會進歩論の要點と其の所論に基く所の現在社會組織に對する批判、就中露西亞の經濟的組織並に其の發達に關する見解の概要を視ふに止めよう。

凡そ彼がその個性化說に基き社會進歩の法則として述べる所に從へば、進歩とは彼等の生活の充實に向つての各個性の漸次的接近、各機關の間に於ける最大可能にして最も包括的なる勞働分割への漸次的接近及び各人の下に於ける最小可能なる分業への漸次的接近である。此の運動の傾向を妨害するものは總て不道德的、不正、有害且つ背理的のものである。又社會の種々相を減り斯くて社會の各員たる個性の種々相を増

危険なる仕事に従事した。蓋し彼が其の學說を發表するに當りて間接的方法を用ひ、Darwin, Spencer, Comte, Mill 等の學說を分析し批判する論文に於て之を披瀝説述するを常として居たからである。併し乍ら彼の著述は未曾有の好評を博し其の名聲は晩年に至る迄決して失墜する事なかりしと傳へらるゝ。實に彼の生涯は、かの流離轉變極まりなかりし露西亞革命家の間に伍して誠に坦々たる行路なりしと雖も、彼が個性解放の叫びは Bakunin 及び Lavrov の其れと同様、苛酷なる獨裁的專制支配の下に沈溺せる民衆の肺腑に深く徹する熱火であつた。

彼も亦 Lavrov に於ける如く主觀主義的方法の精神即ち目的論的倫理的考察の精神に準據し此の方法に基いて最も強く「個性の爲めに戦」を主張した。彼の社會哲學的思想は理論と實行との合致、眞理(Pravda)と正義(Spravedlivost)を加せしむるものゝみが道徳的であり正當であり、合理的且つ有用である。(Kulecki; Bd. II. S. 56. Masaryk; Vol. II. p. 151) 社會を一の有機體なりと觀する Spencer 流の見解に抗辯し、集合意識の觀念を排除する所のミハイロヴスキイにとりて、社會は同種同價値の個人から成る一の組織である。故に歴史的社會的事實の説明は社會全體の見地から出發す可きではなくて、個人の意識を其の立脚點と爲す可きである。而して彼に依れば、個性が最も明白に自己を表現するのは勞働に於てある。如何となれば、勞働の個人に對する關係は運動の物體に對する關係の如きものだからである。勞働は個性の主たる屬性であつて個性が個性としての主たる特長である。技能、血統、富、及び美の如きは本質的のものではなくて多少偶然の特質である。然るに勞働はエネルギーの有意的使用であり其の合

目的的消费であるから、従つて其は個性の表現であり且つ其處に個人的人格が發展する。彼は勞働なる概念を單に物質的財貨の生産に限定せずして、其の概念の中に、人間を支持し發展せしむる總ての合目的的活動を包含せしめて居る。而して勞働に於ける協同(Cooperation)は社會化の最も強力なる要因であると言ふ。換言せば社會性の本質は個人の協働に求む可きであつて、此の協働の性質が即ち次代の特性を決定するものである。(Masaryk; op. cit. p. 144. Hecker; op. cit. p. 145)

ミハイロフスキイは協働と經濟的分業とを截然峻別して次の如く説く。前者は單純なる社會的共働であつて同一目的を追求する平等なる人々の共同勞働から成り、後者は複雑なる社會的共働であつて生産行程に於て分化され専門化されたる諸々の職分から成る。經濟的分業は工場

學が、經濟的分業の中に人間の同胞愛存とすとの見解を批判し、次の如く言ふ、「分業が愛を支持するといふのは絞索が死刑囚を支持するといふのと同様である。正義が満足せられた後に於て猶此の死刑囚が絞首臺から下され埋葬せられないとすれば、絞索は益々深く彼の首に喰ひ入り、遂には首と胴體とを切り離して終ふだらう。若しも隣人に對する愛が分業の原則に基くものとすれば、此の原則は隣人に對する愛を支持するために益々深く喰ひ入るであらう。併し斯く行はれつゝある間に隣人の數は次第に減少するであらう」云。(Works. Vol. I. p. 182)故に彼の所見に従へば、經濟的分業は個性を殺すものである。其は人間を一箇の道具に變じ、人間の幸福の唯一の原因たる各機能間の調和を破壊し斯くて人間を動物界に墮落せしむるものであつた。(Hecker; op. cit. pp. 146-147)

制度の中に誘導せられた。而してミハイロフスキイは之を以て個人の肉體的、知識的發達更に道德的發達すらも脅かすものであるとして擯斥する。「蜂や蟻の間に於ける經濟的分業は肉體上の退化を招來し、蜂の間にありては性のない勞働すらも生じた」(Mihailovskii; Works. St. Petersburg. 1896. Vol. I. p. 53. Hecker; op. cit. p. 147)若しも工場勞働者が一の「手」となり、彼等の勞働が手足を機械的に絶えず同じ様に動かす事である場合には、人類社會に於ても亦同じ様な結果が生じないであらう乎。假令近代生活が知識的準備を必要とすも雖も、斯の如き勞働形式の行はるゝ限りは、それは或る特定の神經に不斷の刺戟を與へ、其の結果必然的に其等の作用を衰弱せしむるが故に、従つて彼等の精神作用を薄弱ならしめざるを得ないのである。ミハイロフスキイは、かの Manchester 學派の經濟

十二

次に個性の發達、協働並に經濟的分業に關する叙上の見解から彼は過去現在及び未來に亘る人類進歩の諸階梯を如何に批判し解釋したかを檢するに、先づ彼は社會進歩の三階梯を擧げて之を説明する。第一階梯は客觀的人類中心階段(objective anthropocentric stage)であつて、其の特長とする所は、人間が其れ自身を外部から決定されたる、自然の、客觀的絶對的の眞實の中心と考ふる純朴なる信仰、之である。それは擬人主義、神秘主義の段階、神學及び宗教の時代、客觀的目的論の階梯である。第二の人類中心外階段(eccentric stage)に於ては、肉體と靈魂との二元論が極端に唱道せられ、人間は全く抽象的觀念の支配の下に置かれる。第三の即ち主觀的人類中心階段(subjective anthropocentric stage)は純乎たる人類時代であつて、其處では人間の倫

理的理想及び人類の眞の目的が實現せられる、同時にそれは科學及び實證論の時代である。

さて此等三階段の經濟的形相如何と言ふに、社會は彼にとつては常に勞働の組織即ち共働の社會である。即ち第一階段を覆ふものは單純協働であつて、各個人が同一の實際的目的のために共に相提携し相協力して勞働する。其の當初より此等の各個人は各々異なる天賦を持ち、異なる範圍の訓練を受けて居る。然かのみならず、此の階段に於てすら、假令顯著ならずとも、協働の最初の結果が分業の形式を以て現はれて居る。併し分業が甚だ顯著なる事實となるのは第二の階段に於てである。此の階梯は、人間を結合せんとする何等かの目的、即ち何等かの人類的目的を以て特長とする事なく、理論と實行とは分離し、分業の完成に伴ふて個人は一斷片となり社會の單なる一器官となる。個性

の完全は失はれ、人は一人格たるを熄むる。茲に彼は發達階級と發達典型とを區別し、分業は發達の階段を高めるが其の典型を低下するものであると觀する。例へば性なき蟻は分化せられざる原始的の蟻よりも遙かに有能であつて、それはより多くを生産し従つて社會にとつてより有用である。茲に文明の階段は高められて居るけれども併し同時に其の典型は低められて居るのである。人類社會に就て之を言へば、英國の勞働者は村落共產團體に生活する露西亞の農民よりも遙かに高き文明の階段に居るけれども、併し後者は前者よりも遙かに高き文明の典型を有して居る。何となれば、それは遙かに廣汎なる活動の範圍を有し遙かに完全なる個性を具有して居るからである。(Works, Vol. I, pp. 477-478)

然るに第三階段に於て人はより高き進化の程度の上に、單絶なる協働の形式に復歸する。假令

十三

單純ではあるが、各人が其の特有の個性を總ゆる方面に於て調和的に發達させ、且つ相互に共同目的の爲めに協力する所の高尙なる協働が益々發達する。其處では「人は人類の爲めに、總ゆる物は人類の爲めに」と記されるであらう。

(Masaryk; op. cit. pp. 146-148. Hecker; op. cit. pp. 148-149)

西歐諸國民は既に第二の階段の充分なる發達を遂行し、今や如何にして最終の階段に進展し得可きかの境遇にある。然るに此間にありて未だ第二の階段にも到達し得ざる露西亞は、果して如何なる進歩の行程を辿る可きであらう乎、西歐諸國の轍迹に隨從して進歩の必然的階梯を踏襲しなければならぬものであらう乎。又は直ちに第三の階段へ進展し得るであらう乎。換言せば、茲に再び、露西亞は其の特有なる社會的經濟的事情に準據し、資本主義的中間階梯を

ミハイロヴスキイの主張する所に依れば、如何なる生産組織が個性の十全を保障するに最も適合せるやを指示するのが社會學の一任務である。彼は先づ個性を滅卻する所の現在の分業制度に反對するものであるから、従つて此の分業を基礎として大規模生産を行ふ所の工場組織に反對する。又彼は經濟上の自由競争に由來する所の生産上の無政府状態並に人格の奴隸化を排除す可しと言ふ。要之、人類の健全なる發達と個性の十全無障の調和的發達とを阻害する所の資本主義的經濟組織を斷乎として排斥する。西歐諸國は既に斯の如き經濟組織の害惡を明白に指示して居る。然るに露西亞は村落共產團體を維持し發達せしむる事に依つて此の墮落から

免れ得るであらう。彼は言ふ「我國の村落共產制度の反對者等は、此の制度が個人の自由を毀損するを號ぶ。彼等は言ふ、村落共產制度は土地所有者の四肢を其の土地に拘束し、彼に個人的活動の何等の自由をも與へない。嘗て此事は西歐に於て唱へられた。其處では村落共產制度は頽廢し、個人は勝利を得て職業選擇の自由を獲得した。彼等は唯此の新なる條件に適應すれば宜かつた。併し乍ら解放された個人の自由選擇權は直ちに歴史發達に依つて制限されて終つた。彼等は土地所有者とならないで工場奴隸となり、巨額の富を生産し乍ら而も日々の窮乏に苦しまねばならなくなつた」云。(Works.

Vol. III. pp. 199-200) 彼は一國の自然的富源は唯産業界の自由競争に依つてのみ開發せられ得るといふ經濟學說に挑戦し、斯の如き富源は村落共產制度に依つて十分開發せられ得ると言

の資本主義的生產組織の脅威と害悪とより免れて個性の完全なる發達を保護す可き避難所であるが故に、而してそれは露西亞民の將來を決定するものであると信じたが故に、詳言せば、此の制度が適當に制限され有効に指導せられたならば、人間の全個性に調和ある發達の機會を賦與し、依つて以て發達の典型の低下を防止し益々より高き文明の階梯へ接近せしむるものなるが故に、村落共產團體の支持と發達とを計る事は最も緊要であると主張せられたのである。彼は明に當時の露西亞に於ける村落共產制度崩壞の氣運と資本主義的企業の勃興といふ否み難き經濟的事實を目撃し、彼の理想と現實の狀態との矛盾背馳を意識して居た。併し乍ら其の如何に拘らず露西亞は此國獨特の社會的進歩を達成するに相違ないとの確信を放擲する事がなかつたのである。彼は Herzen に對する Marx の

ひ、又各個人は國家の富を増加する爲めの犠牲に供せらる可きものではないと主張した。彼に信ずる所では、經濟生活に於ける個人的創意は財產所有者にのみ可能である。故に「勞働者から其の生産物を奪ふ如き社會組織程恐る可きものはない。斯の如き社會組織は、畢竟、人民から個人的創意、個人的獨立及び其の自由を奪ふものである。」(Works. Vol. I. p. 704. Hecker; op. cit. p. 149) 此の見解に立つて彼は、自由主義經濟學者が不當にも抽象に傾く態度を責め、彼等の國富の觀念は其の美名の下に個性を窒息せしむる抽象的虚構であると難詰した。

併し彼の村落共產制度の尊重は、之を以て一種の偶像化する所の、換言せば露西亞の農民を以て此國の國民的精神に特有の或る神秘的な崇高な特性を有するものであると觀する所の、かのスラヴ主義者の態度ではなかつた。その社會論争に言及し、露西亞は特殊なる進化を成就し得可しとせる前者を支持して次の如く彼の見解を述べた。曰く、露西亞は歐羅巴を學ばねばならないし又學ぶであらう。さて Marx の著書を讀む者は、露西亞の經驗しつゝある革命的行程に想ひを致すであらう。そして若しも露西亞が歐羅巴と同一の行路を經由す可きものとすれば彼等は現に行はれつゝある所のものを充分知悉する事に依つて之を爲す事が出来る。然るに露西亞の狀態は歐羅巴に於ける狀態とは甚だ異なるが故に、前者に於ける資本主義化の發展は特殊のものたる事を證明し得るであらうと。Marx は之に答へて、彼 (Marx) は其の社會進化の法則を嚴密に普遍的に適用するゝものとして形式立てたのではない。併し一國が此の特殊なる發達行程に入り込むと同時に彼の進化法則の形式に支配せらるゝに至る事を指摘したのである。

個々の場合に就て言へば、勿論其の歴史的存在條件の特異性に關聯して考察せられねばならぬ。露西亞の資本主義的發展は絶對的必須のものでなく、又露西亞の農民が西歐諸國に於ける如く工業上の自由労働者となる爲めに無産階級化されねばならないといふ事も亦本質的問題ではない。Mark の此の答を得たるミハイロヴスキイは、其の晩年(一八九二年)に至りて益々、露西亞の社會的進歩は其の歴史的、社會的條件の特殊性に倚據して獨特の徑路を辿り得可しとの主張を確保した。(註)

(註) Masaryk の記す所に依れば、ミハイロヴスキイに對する Marx の此の答辯は一八八八年初めて露西亞の一雜誌に「Marx に對する一書」として掲載されたものである。(Masaryk: op. cit. pp. 159-160 脚註參照) Marx の此の見解は、彼の社會進化論の根本原理の一面を述べたものであるが、或は Plehanov の解する如くミハイロヴスキイの苦惱を慰むるの意圖を以て書かれたものであるかは異論の存する所であらう。併し Marx は其に屢々、露西亞の村落共產制度

人民に保證する事ではなければならないが、斯の如き計畫の實行は露西亞に於ては甚だしき困難を伴はないであらう。其の意如何と言ふに、多數の者が、既に、一般的に、其の生産手段を剝奪せられて居る所の西歐諸國に於ては、此の種の企圖の實現は當然社會組織の根本的變革を意味するが故に、勢ひ革命的ならざるを得ないが、之に反して未だ一の大工業も存在せず、完全に農業を離脱せる労働階級も未だ存在せず、且つ農民が土地の共有を享受して居る露西亞に於ては、生産手段の不變的の確固たる保護といふ事は既に不完全な形式で存在して居るものを確立する事に他ならないから、それは革命的にではなくて寧ろ保守的に行はるゝであらうといふにある。故に、彼に依れば、改革の出發點は斯の如き土地共有制度を最も適當なる方法を以て人民に保證する事である。彼の理想として既述せる

が此國の將來の社會的發展の出發點たり得る事を認容し、或る條件の下に於ては露西亞は必ずしも西歐諸國に於ける如き資本主義的發展階段を経由するの要なしと考へて居た様に思はれる。若しも其後に於て彼が斯の如き見解を一掃したとすれば、それは露西亞に於いても亦著るしき資本主義的發展の生じつゝある實狀を看取し得たからである。 Engels は「資本論」第三卷の序文に於て「Marx が露西亞の友人等が此上なく望まじき完全な形で彼に提供したる、農奴解放以後の土地所有に關する統計的調査材料其他の出版物を數年間原語で研究し、露西亞に於ける農業生産者の搾取は英國の工業的賃銀労働者の場合と同様に記述せらる可きものであると信じて居た、併し此の思索の結果を發展せんとせる計畫の實行が不幸にして斷念せられた、と記述して居る。(Das Kapital, Bd. III, Hamburg, 1922, Vorwort, ix. 參照) 併し此の問題の考察は自ら他日の機會に譲らる可きものである。

十四

露西亞の社會的變革に關するミハイロヴスキイの見解は、當時の革命主義的急進論者の間にあつて、寧ろ樂觀的であつた。彼に依れば、現時に於ける社會的變革の第一條件は生産手段と所の協働に依つて結合せらる可き社會主義的社會秩序の達成は正に此の出發點より初められねばならないものであつた。然るに彼に依れば國家は人民に對して最も好適の労働條件及び發達條件を保證するの任務を委ねらるゝ、權力であり、村落共產團體の支持と發達は國家の權力を俟つて初めて可能なるものであるから、從つて此點に於て彼は、社會的經濟的制度に對する國家の一切の干渉を排する Lavrov の主張と相違せざるを得なかつたのである。

勿論彼は其の綱領に於ても、手段方法の見解に於ても Lavrov に賛同し、科學の革命に對する意義並に現在の鬭争に於ける批判的に思考する個人の重要に關しても亦後者に一致した。彼は又 Bakunin と共に大民衆運動を認めた。そして最後に新社會秩序を實現するために先づ陰謀手段に依つて政府權力を篡奪するの必要を是認

するの點に於て、當時の社會主義的シヤコビン黨 Tkachev に同意した而も彼は多くの點に於て此等三者に相違して居た。明かに彼は、革命主義的宣傳は先づ大衆運動なくして行はる可き事、並に全革命主義的活動は先づ Tkachev の徒の企圖するが如き陰謀手段の程度に制限す可きものと考へたのである。加之、彼が社會的政治的權力としての國家の是認は勢ひ革命黨に依る國家權力の略奪の主張を伴ふものであつて、此の點に於て、かの、國家及び其の中央集權主義的權力は速かに若くは漸時的に全く廢止せらる可きであるとする Bakunin 及び Lavrov の主張と根本的に乖離するものであつた。(Kulczycki a. a. O. SS. 62-63 参照)

要之、既し Lavrov の章に於て指摘したる如く、此等當年の露西亞社會思想家の學説は政治的、社會的運動の潮流を科學的に合理化するのあつた。例へば「民衆の中へ」(V Narod)の革命的社會運動に於て我々は常に革命主義的宣傳の共同目的によつて集合したるのみならず、更に個性の尊重といふ倫理的目的に依つて結合團結したる幾多の結社を見るであらう、併し此等の事情に關しては茲に縷述するの煩を避け、後日七拾年代以降の露西亞社會運動の實際を檢するの時に於て詳述する事に仕度いと思ふ。

(附記) 本編は本誌第十八卷第七號—第九號所載拙稿「農奴解放後の露西亞社會運動」の續稿として草したるものであつて、後日の機會に譲れる「七拾年代の實際的社會運動」の一篇と相俟つて之が全篇を成す可きものである。茲に此の旨を附記して偏へに讀者の御諒承を乞ふ次第である。

佛教の興立と商人階級の活動

友松 圓 諦

一、時代の大勢と商人階級の擡頭

アーリヤ (Aryan) 民族の勇敢なる植民運動は

第十九卷 (二五一) 佛教の興立と商人階級の活動

意圖を包藏せる一事極めて明白なる所であるが其の希望する所も亦峻嚴なる專制的獨裁の支配に對する徹底的の闘争にありし事は、結局に於て國家權力を是認する所のミハイロフスキイに於ても異なる所なく、唯 Bakunin 及び Lavrov が進んで無政府主義的國家否定の教義を標榜して以て專制主義的抑壓的國家權力に對抗せるに反し、前者は先づ何よりも專制的支配に對して個性を防禦するの必要を痛感し、彼の所謂眞理と正義との融和合致を理想とするブラヴダ主義を提唱したるものである。ミハイロフスキイの社會主義は畢竟人道主義的倫理的論理的適用である。而して個性は彼の社會主義の Alpha であり Omega であつた。此の哲學及び社會主義に於ける倫理的傾向の高調こそ實に露西亞主觀主義學派の最も著るしき特長である。

ラヴロフ及びミハイロフスキイの思想が當時の急進的知識階級に與へたる影響は甚だ深刻で開牟那河 (Yamuna) 恒河 (Ganga) の肥沃なる流域に無數の都市 (Nagarah) 村落 (Gāno) を産出して所謂婆羅門 (Brahman) 文明の基礎をきづいたのであるが、今や彼等の植植事業は茲にその鋭鋒をゆるめて、漸次 (1) 「なれたる」ところに住居をとる (esa attano vasanatthane alayan katva) の惰風をかますに至つた、更に又、この惰風は宗教的思想と相關係して彼等の開拓せる境域を神聖なる中國 (majhadese) として自負し、先住土蕃の雜居せる未開拓地方を邊地 (Paccantajjanapado) として貶視し (gr) 愈々坐居定住の傾向を強からしめたのである。然しながら、佛陀の出現した西紀前第六世紀前後に於ては、これらの宗教的思想に對する反抗運動は漸く擡頭してきたつて、再び民族發展の曙光を見るに至り、遠く中國の疆域をふみこえて利潤多き邊土異境に交易する多くの商人 (Varjio) 隊商 (Satho) を